

論文

韓国における初期キリスト教受容の要因 [上]

常石希望

概要

本稿は表題に示すごとく「韓国初期キリスト教受容の要因説明」をテーマとする。わかり易く言えば「なぜ韓国だけが、これほどのキリスト教国になったのか？」という問いに対し総合的な回答を試みようとするものである。

歴史的現象というものは、きわめて複合的であり、かつ生きている現象だとも言う。かかる歴史的現象に対し、あとから理性的に理由づけを与えたり、要因を求めたりすることは決して易しいことではない。それ故、本稿で与えた諸要因およびその体系化が正鵠を射たものかどうかに関しては、識者の批判をまつしかない。

なお表題に「初期キリスト教」とし、「初期」に限定した理由については本稿（[[0]]はじめに）に明らかにしている。また受容要因を「外的要因」と「内的要因」に区分しているが（「目次」参照）、これは〈李萬烈「韓国教会の成長とその要因」；所収『韓国基督教と民族統一運動』ソウル、韓国基督教歴史研究所、2001、第2部〉などに用いられる用語に従ったもので、「内的」とはキリスト教あるいは韓国教会「内」の要因の意であり、「外的」とは教会から見れば外部的と言える政治的・社会的・歴史的等々の要因を意味する。

本稿は上のテーマ、すなわち「なぜ韓国はキリスト教国となったのか？」というジャーナリスティックなテーマに即してなされているが、しかしそのテーマを離れ、あるいはそのテーマとは無関係に、筆者本来の

研究目的は「韓国キリスト教史」自体に存し、これを一步一步研究し明らかにしてゆくことに存す。従って本稿は「韓国キリスト教史研究」に関するつたない成果でもある。紙面の制約上、「第三章、一次的要因」以降は〔下〕に収録することとした。

キーワード：韓国・朝鮮，初期キリスト教（1885～1945年），草創期，一次的（二次的）要因，外的（内的）要因，日本との関係

目 次	
【0】はじめに	……（以下〔下〕収録）……
【Ⅰ】統計と分析	
【Ⅱ】二次的要因	【Ⅲ】一次的要因：外的要因
1. なぜキリスト教か：大前提	【Ⅳ】一次的要因：内的要因
2. アメリカ	【Ⅴ】むすび、他
3. 侵略者とキリスト教受容	註，文献表
4. 韓国教会人の回答	
註，参考文献	

【0】はじめに

韓国キリスト教史は、以下の三つの時代に区分することができる。

- ①1700年代末期～1885年頃までの「カトリック（旧教，天主教，西学）時代」。
- ②上に連続する1885～1945年までのプロテスタント（新教，改新教）キリスト教⁽¹⁾を主とし，カトリックをも含めた「初期キリスト教時代」。うち，この時代の最初期1885～1910年前後までを特に「草創期」と称す。
- ③1945年以降現在までの「後期キリスト教時代」。ここでもプロテスタントを主体に，カトリックを含む。

以上のうち本稿「韓国における初期キリスト教受容」が主として主題とするのは，②1885（明治18）年～1945（昭和20）年までの時代であり，またカトリックを含めつつも主たる対象はプロテスタントに置かれる。

韓国における初期キリスト教受容の要因 [上]

その理由について一言のべるとすれば、上記①～③をもって全体とする「韓国キリスト教史」および同「受容史」は、その量・質両面において②の時代が最も重要だと判断しているからである。特に私たちのテーマである「受容」という視点で捉えた場合、①「カトリック時代」は結局は「不受容」に終わっている点。また③「後期キリスト教時代」は、量的には最大の増加伸長を示す「発展期」ではあるが（次章《表2》および、その分析、参照）、しかし例えば韓国キリスト教史研究の第一人者である李萬烈（イ・マニョル）教授のごとく、②の「草創期」を含めた「初期キリスト教史」をキリスト教受容の「定着期」と位置づけるなど、この「定着化」という「初期キリスト教」の基礎の上に、③の「発展期」が継続するという理解が一般的だと言えるからである⁽²⁾。換言すれば、①においては「黄嗣永帛書事件」⁽³⁾などを契機に、結局カトリックは受容されたとは言えず、また、③は②の定着期を前提とした上での発展期であれば、受容史として捉えた場合の韓国キリスト教史において最も重要な時代は②、すなわち本稿が主題とする範囲であることになろう。

もとより、上の見解のみが唯一の正当な見解であるなどと言うつもりはない。また、従って①、③に関する研究は重要性を持たないなどと言うつもりもない。むしろ①、③についても、これをもつばら扱った研究発表、あるいはこれを十分に盛り込んだ研究発表を予定している。

ところで、②「草創期」を含む「初期キリスト教時代」とは、どんな特徴を備えた時代なのかという点に若干の説明を加えておくほうがよいであろう。この時代の始点1885(明治18)年とは、二人のアメリカ人宣教師の来韓と共に朝鮮半島にプロテスタント・キリスト教が宣教を開始したとされる年であり、終点の1945年とは太平洋戦争の日本敗戦と共に日帝植民地支配から解放された年であり、両者にはさまれた約60年間はそれである。しかもその60年間とは、当初は国家の開化と独立を旨しつつも、日本、清、ロシアという朝鮮に野望を抱く国家間闘争に翻弄され、遂には日清戦争、日露戦争に勝利した日本によって侵略と植民地支配下におかれた時代、それでもなお3・1独立運動などを通じ日帝支配に対して抵抗と闘いを挑み続けた時代である。つまり一言でいえば、日本の侵略と支配下に置かれ、かつそれと闘い続けた時代だと言える。このような時代に、韓国キリスト教は宣教され、着々とあるいは急激に教会と信徒を増やし、朝鮮半島の地に定着したのであり、遂には今日「キリスト教国家」と称される程の大発展への基礎を築いたのである。

以上のごとく本章では、本稿の主題範囲を明らかにしたが、次章では「宗教人口統計」などを用いながら実証的に「韓国キリスト教」を全体的に捉えてみたい。

【 I 】 統計と分析

韓国がアジアに冠たるキリスト教国となり、「東洋宣教史の奇跡」とか「近代史の奇跡⁽⁴⁾」などと称されるようになってすでに久しい。昨今の統計はいずれもが、少なくとも国民の25%以上、つまり韓国国民の4人に一人以上がキリスト者であることを伝えている。例えば1998年版『韓国統計年鑑』韓国統計庁刊(1995年国勢調査による)宗教人口分布は次のごとくである。

〈韓国宗教人口分布〉

韓国総人口	4,445万人
無宗教	2,195万人 (49.2%)
キリスト教	1,171万人 (26.3%)
内、プロテスタント	876万人 (19.7%)
内、カトリック	295万人 (6.6%)
仏教	1,032万人 (23.2%)
儒教	21万人 (0.5%)
円仏教 ⁽⁵⁾	9万人 (0.2%)
天道教 ⁽⁵⁾	2.8万人 (0.1%)
大倮教 ⁽⁵⁾	0.8万人 (0.0%)

《表1》「1998年版, 韓国統計年鑑」

《表1》目につく点。(一)キリスト教人口の多さ。(二)キリスト教の二大勢力であるプロテスタントとカトリックの昨今の比は、約3対1である点。(三)仏教は第2位であるが一千万人を超えており、キリスト教との差は小さい。(四)韓国でも一番多いのは無宗教人口であり、宗教人口との比は約半分半分である点。

ところで、上のキリスト教人口だけを年次別に1794年～1990年まで示したものが次の《表2》である。特に1890～1990年までは10年ごとの統計が示されている。こうした便利な統計は見つけにくいだが、以下は元ソウル神学大学総長、姜(カン)グンファン『韓国教会の形成とその要因の歴史的分析』ソウル、大韓基督教書会出版、2004年による。⁽⁶⁾

韓国における初期キリスト教受容の要因 [上]

〈年次別 韓国キリスト教成長表〉							
年次	カトリック人口	%	プロテスタント人口	%	全キリスト教人口	%	国民人口
1794	4,000						
1801	10,000						
⋮							
1857	15,000						
1866	23,000						
1883	12,035						
1890	17,577	0.18%	265		17,842	0.18%	10,000,000
1900	42,441	0.42%	18,081	0.18%	60,522	0.60%	10,000,000
1910	73,517	0.56%	167,352	1.2%	240,869	1.78%	13,000,000
1920	90,517	0.52%	215,032	1.2%	305,549	1.77%	17,264,000
1930	109,000	0.53%	306,071	1.4%	415,071	1.98%	20,438,000
1940	150,000	0.63%	372,000	1.5%	522,000	2.21%	23,547,000
……以上までは朝鮮半島全体の統計、しかし以下は大韓民国（韓国）のみの統計……							
1950	257,668	1.2%	600,000	2.9%	857,668	4.1%	20,000,000
1960	365,968	1.4%	1,257,428	5.0%	1,623,396	6.4%	25,000,000
1970	839,711	2.7%	2,197,336	7.0%	3,037,047	9.7%	31,000,000
1980	1,189,863	3.2%	5,986,609	16.0%	7,176,472	19.3%	37,350,000
1990	2,312,328	5.3%	10,337,075	23.8%	12,649,403	29.1%	43,420,774
年次	カトリック人口	%	プロテスタント人口	%	全キリスト教人口	%	国民人口

《表2》

※《表2》は、〈姜グンファン『韓国教会の形成とその要因の歴史的分析』ソウル、大韓基督教書会、2004年、p. 25〉を基にして作成したものである。1950年韓国戦争（朝鮮戦争）発生以降の北朝鮮のキリスト教人口他は確認できていないため、同年以降の統計はすべて韓国のみである。

《表2》の分析。韓国のキリスト者が多い多いと言っても、《表2》をよく見ればわかるように、実際に人口が激増したのは、以下の「2つの時代」である。

第一、1890年～1900年代（1890～1910年までの20年間）。これは「初期キリスト教」のなかでも「草創期」にあたる時代である。1890年代（1890～1900年）10年間に「全キリスト教人口」は一気に3.5倍化し、続く1900年代10年間にも6万から24万へと4倍化しているのがわかる。「プロテスタント」のみ見れば、いわゆる「草創期」における成長は目ざましく、1890年265名の信徒が10年後には1万8千に、さらに10年後の1910年には16万7千余へと、驚くべき成長をなし遂げている⁽⁷⁾。またカトリックも全体として順調な成

長をなしているが、特に目立つのは1890～1900年の2.5倍化である。これは従来の迫害と殉教を繰り返して来た原因・禁教令が、実質的にはこの時期に解かれたに等しいからだと考えよう⁽⁸⁾。

第二、1970～1980年代(1970～1990年までの20年間)。1970年代(1970～1980年)10年間に「全キリスト教人口」は2.5倍化、400万人以上の増加を示しており、同様1980年代(1980～1990年)の10年にも550万人程の増加を示し、パーセンテージでは19%から29%へと一気に上昇していることが確認できる。[以上《表2》の分析]

もとより、これ以外にも目につく増加現象がないわけではないが、しかしながら上にあげた「二つの時代」ほどの顕著な増加成長を示している時代は他にはないことが《表2》から確認できよう。またこの「二つの時代」については、一部前章でふれた。

以上の韓国キリスト教人口に対し、ちなみに日本の場合のキリスト教人口はどれ位であろうか。両国の宣教の歴史は、カトリックについては日本のほうが約230年早く開始されており、プロテスタントの場合は日本が12年ほど早く19世紀末ほぼ同時期に開始されている⁽⁹⁾。いずれも日本のほうが宣教開始が早いにもかかわらず、日本のキリスト教は明治以来今日まで、いまだに1%に達したことはない。《表3》は、0.4%～0.8%に達した年度を中心にして作成した「日本キリスト教人口推移」である⁽¹⁰⁾。

〈日本キリスト教人口推移〉

1948年(昭和23)	……	33.1万人	[0.4%]	……	内訳：P19.9万：K11.1万：O1.4万
1954年(昭和29)	……	45.9万人	[0.5%]	……	内訳：P23.3万：K18.5万：O3.3万
1958年(昭和33)	……	56.5万人	[0.6%]	……	内訳：P29.7万：K22.7万：O3.4万
1960年(昭和35)	……	65.5万人	[0.7%]	……	内訳：P34.0万：K26.6万：O3.5万
1988年(昭和63)	……	100.5万人	[0.8%]	……	内訳：P53.5万：K42.8万：O2.5万
2000年(平成12)	……	109.4万人	[0.8%]	……	内訳：P59.2万：K46.4万：O2.5万

《表3》『キリスト教年鑑，2001』

※Pはプロテスタント，K カトリック，O オーソドックス（ハリスト正教会，ロシア正教会など）を示す。

《表3》から明らかとなるのは、(一)キリスト教人口が100万人に達するのは明治以来、1998(昭和63，平成元)年が初めてのことであり、しかも同年初めて0.8%となった。(二)韓

韓国における初期キリスト教受容の要因 [上]

国に比べ、日本の場合はプロテスタントとカトリック比はほとんど同じ。(三)何といても、韓国に比べると余りにも少ないキリスト教人口、などであろう。

仏教学の大家、中村元はその主著の一である。「東洋人の思惟方法シリーズ」『第4巻、チベット人・韓国人の思惟方法』のなかで次のように述べる。⁽¹¹⁾

「韓国人の思惟方法を考究するためにとくに注目すべきことは、千数百年の長きにわたって仏教国であったにもかかわらず、近年はキリスト教国に変わってしまったということである。

仏教国がキリスト教国に転向してしまった事例は、他には存在しない。アジアでは唯一の事例である。なぜそうなったか？それは朝鮮戦争のとき、民衆が苦難に悩まされ、その生活が極度に疲弊していたために、アメリカの救援をたよりにし、感謝していたためである。」中村元

“一体、韓国だけがなぜそうなったのか？”という中村元の間いは、私たちの問いでもある。しかもアジア諸国、特に中国・インド・日本にとってと同様、韓国にとってもキリスト教は、見知らぬ異国の宗教であった。あるいは閔庚培の言うように「キリスト教が伝える福音の気質とは全く異なる心性を有した国土・韓国」、従って「体質がまったく合わない宗教」に外ならなかったはずである⁽¹²⁾。にもかかわらず、なぜ韓国だけがかかるキリスト教受容を果たし、キリスト教国となったのであろうか。

なお上において中村元が挙げる「その要因」、すなわち“朝鮮戦争時における民衆の苦難と当時アメリカの救援を頼りとし、かつ感謝していたため”という要因・理由は、付随的かつ副次的な要因の一とはなりえても、決して「主要な要因」を形成しているとは判断できない。中村博士のみではなく、一般にかかる俗説、すなわち「アメリカの存在（特に朝鮮戦争時）を韓国キリスト教受容の最大要因とする」という俗説が存すが、これについては後述（〔Ⅱ-2〕）参照。

ところで私たちは、この問いが提起する課題性をきわめて重要であると考えている。なぜならこれは、単に韓国のキリスト教という一宗教現象に限定される問題ではなく、むしろそこには韓国という国そのものを解く「鍵」が隠されていると思うからである。換言すれば、中村博士の言う「アジア諸国のなかで韓国のみが唯一キリスト教国になった」という、韓国のみが成しえたキリスト教受容の過程の中には、他の国々とは異なる韓国という国の独自の文化・歴史・国民性をもっとも顕著に現れているはずだからである。

一般に「受容」という現象を構成する主な要素は、次の三つだと言えよう。「対象」「主体」「状況」の三者である。①「対象」とは、受容する「対象」、すなわちここでは「キリスト教」が「対象」。②「主体」とは、そのキリスト教を受容する「主体」、つまり「韓国」。③「状況」とは、上の「対象」と「主体」が、どのような歴史的・社会的・政治的・文化的、総じてどのような状況的制約のもとで相互にかかわっていったのかということを示す。——もとよりここで、いわゆる「受容論」を展開するつもりはない。しかし上述したごとく、「韓国キリスト教受容」の研究とは、広義には上記②受容「主体」である韓国そのものと、その文化に迫る研究でもある。同様、次章の冒頭では、①受容「対象」であるキリスト教そのものの分析を行うことから始めたい。

【Ⅱ】二次的要因

以下、韓国キリスト教受容の要因を総合的かつ具体的にみてゆく。まず本第Ⅱ章では、「二次的要因」として4点を挙げ、それぞれ説明と検討を加えたいが、ここに言う「二次的」とは次章第Ⅲ章以下で主題とする「一次的」要因に対して、「二次的」という関係に立つ。「二次的要因」の4点とは以下である。

1. 「なぜ韓国はキリスト教を受容したのか」という命題は、論理的かつ実質的にも「なぜ韓国は、ほかならぬキリスト教を受容したのか」という問いでもある。つまり「なぜ韓国は {イスラム教でもなく、ヒンドゥー教でもない} キリスト教を受容したのか」という問いを通し、前章で言及した、受容「対象」・キリスト教の本質を検討する。
2. 先に中村元が挙げた「アメリカ」を受容要因とする見解、あるいは俗見の検討。
3. 他のアジア諸国がキリスト教を受容しなかったのは、キリスト教が侵略者の宗教であったから。これに対し韓国の侵略者は、日本という非キリスト教国家、しかも天皇制神道を国教とする国家。かかる日本国家およびその宗教に対し、それらを克服・否定しうる宗教としてキリスト教が受容されたとする見解、およびその検討。これは一見すれば、かなり決定的な要因、「一次要因」と思える。しかし、もしそうであれば「台湾」もキリスト教国になっていなければならない。なぜなら、台湾も韓国同様、非キリスト教国・日本の最初の植民地であったからだ。併せて、カトリック信徒90%以上という国家、フィリピンについても同じ視点から若干の考察を加えておきたい。
4. 韓国人、特に韓国の自覚的キリスト者である牧師・長老たちといった教会人は、この受容の要因・理由についてどう答えるのか。最も多いのは「神の選び」。これに対する検討と考察。

【Ⅱ-1】なぜキリスト教か・大前提

「なぜ韓国は{イスラム教でもなく、ヒンドゥー教でもない}キリスト教を受容したのか」。地理的に考慮しても、宗教内容を捉えても、ヒンドゥー教は仏教に近く、イスラム教もよりアジア的要素が強くと、従って韓国は十分にイスラム教国やヒンドゥー教国となりうる可能性があったはずなのに、なぜよりによって「キリスト教国」になったのか。キリスト教だって、イスラム教やヒンドゥー教同様、韓国人にとっては「体質が全くあわない」見知らぬ宗教であった(註12参照)。ここでは受容「対象」である「キリスト教」自体が検討されなければならないであろう。まず《表4》「2000年度、世界宗教人口」からキリスト教の位置を確かめ、続いて《表5》では「2000年度、キリスト教人口の地域分布」を確認したい⁽¹³⁾。

〈2000年度 世界宗教人口〉	
1. キリスト教	19.7億 (33.0%)
カトリック	10.4億 (17.5%)
プロテスタント	4.2億 (6.9%)
(含、アングリカン・チャーチ)	
東方正教会	2.1億 (3.6%)
その他	
2. イスラム教	11.6億 (19.3%)
3. ヒンドゥー教	8.0億 (13.4%)
4. 中国系民間信仰	3.8億 (6.4%)
5. 仏教	3.6億 (6.0%)
6. 民族宗教	2.3億 (3.8%)
7. 新宗教	1.0億 (1.7%)
8. シク教	0.23億 (0.4%)
9. ユダヤ教	0.14億 (0.2%)

《表4》

《表4》から (一)キリスト教は世界人口の3分の1を占める断然の一位である点。(二)カトリックはプロテスタントの2.5倍である点。(三)一位キリスト教と二位イスラム教を合計した人口は31億を超え、世界人口の52%となり過半数を超える点。(四)三位は仏教で

はなくヒンドゥー教、仏教は五位である。などの点が確認できる。

〈2000年度 キリスト教人口の地域分布〉												
世界キリスト教人口総数	19.7億 (100%)											
<table border="0"> <tr> <td>{</td> <td>ヨーロッパ</td> <td>5.6億</td> <td rowspan="3">}</td> <td rowspan="3">計 8.4億 (42%)</td> </tr> <tr> <td></td> <td>北アメリカ</td> <td>2.6億</td> </tr> <tr> <td></td> <td>オセアニア</td> <td>0.2億</td> </tr> </table>	{	ヨーロッパ	5.6億	}	計 8.4億 (42%)		北アメリカ	2.6億		オセアニア	0.2億	
{	ヨーロッパ	5.6億	}			計 8.4億 (42%)						
	北アメリカ	2.6億										
	オセアニア	0.2億										
<table border="0"> <tr> <td>{</td> <td>アジア</td> <td>3.1億</td> <td rowspan="3">}</td> <td rowspan="3">計 11.3億 (57%)</td> </tr> <tr> <td></td> <td>アフリカ</td> <td>3.5億</td> </tr> <tr> <td></td> <td>ラテン・アメリカ</td> <td>4.7億</td> </tr> </table>	{	アジア	3.1億	}	計 11.3億 (57%)		アフリカ	3.5億		ラテン・アメリカ	4.7億	
{	アジア	3.1億	}			計 11.3億 (57%)						
	アフリカ	3.5億										
	ラテン・アメリカ	4.7億										

《表5》

《表5》より明らかとなるのは、キリスト教は今や欧米白人系よりも、非欧米非白人系（アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ）地域の方が57%、過半数をはるかに超えているという点である。古屋安雄はこれを「逆転」と表現し、大体次のように言う。“百年前（20世紀初頭）のキリスト教人口は約5億人、うち85%が欧米、特にヨーロッパと北アメリカ諸国によって占められていた。しかし21世紀のキリスト教は百年前とは大きく変わり、欧米と非欧米が逆転した。つまり百年前のキリスト教は「西洋の宗教」であったが、現在のキリスト教は文字通り「世界の宗教」なのである。これは言うまでもなく、19世紀から20世紀にかけての、いわゆる「偉大な世紀」（ラトゥレット）と呼ばれた欧米諸教会の世界宣教の結果である”。⁽¹⁴⁾

以上（表4・5および註14）から、キリスト教は継続して世界一位の宗教である点、1980年代には欧米のみならずアジア、アフリカ、ラテン・アメリカにも定着し、むしろその関係は逆転した点、よって地理的にも世界宗教と呼ぶにふさわしい点、などが確認しうる。なぜか？なぜキリスト教はそうなったのか。それは上に指摘したごとく「世界宣教の結果」である。しかもその「宣教」は、キリスト教の創唱者であるイエス自身の直接の命令によるものであった。

「行って全世界のすべての人に福音を伝えよ（マルコ16：15、前田護郎訳）。これが昇天する直前にイエスが弟子たちに語った最後のことば、最後の命令であったとされる。従って、本来キリスト教の宣教は他の目的を持たない。イエスのこの「宣教命令」に従うために宣

教するからである。他宗教に比べ、キリスト教の本質かつ最大の特徴は、この「宣教する宗教」という点にある。例えばヒンドゥー教では、本来は改宗などなく、ヒンドゥーの家庭に生まれた者のみが信徒であって、従ってそこにはそもそも「宣教」の概念がないと言える。イスラム教はそれよりは解放的ではあっても、民族性の制約は強い。仏教は元々、宣教・布教には熱心ではない宗教であり、むしろ個人の解脱を目指す。いずれにしる開祖あるいは創唱者自身が「行け」と命じ、「全世界のすべての人」のところに、すなわち民族を超え地域を超え、地のはてまで行って「福音を伝えよ」という「宣教命令」を下すような世界宗教は他にはない。

「宣教・師」という職名と職業人に、私は以前から興味をもっていた。それは文字通り「宣教する」ことを最終目的とする職名、職業である。それは、一定の教会を管理運営することを職能とする「牧師」とは異なる。イスラム教の「ウラマー（教師、神学者、ホメイニ師もウラマーであった）」とも異なり、仏教の「僧」や「雲水」とも異なる。世界的宗教レベルの宗教のなかでは、おそらくカトリック・プロテスタント他のキリスト教にしか「宣教師」はいないであろう。もしそうだとすれば、キリスト教に固有の職業「宣教師」ほど「宣教する宗教」キリスト教の本質をよく表す言葉はないであろう。草創期の韓国キリスト教時代（1900年前後）には、かかる「宣教師」がいつも100人以上もいたと言われる。また、韓国キリスト教史の最重要研究機関である「韓国キリスト教歴史研究所」の綿密な調査によれば、「初期キリスト教時代」1884～1945年までに来韓した宣教師のうち確認されている者だけでも1529名にのぼり、内アメリカ人宣教師が約70%に相当する1059名をしめる⁽¹⁵⁾。彼らの一部は医師として医療宣教に、学校教師として教育宣教に従事しつつ、いずれも本来の目的はイエスの宣教命令に従った「福音宣教」にあったのである。

しかも、草創期におけるその宣教とは、単に宣教師や牧師にのみ課せられた務めではなく、一般信徒個々が自発的によく宣教し、伝道しようとした。韓国のキリスト教は、草創期から特にその傾向が強かった。「自主」「自立」の2語は、草創期韓国キリスト教の一大特色であった。“牧師がいなくても、宣教師がいなくても、外国ミッションからの経済援助がなくても”信徒だけで教会を建て、聖書を学び、祈り、伝道するようと、最初からそのように宣教師・牧師によって教育されたのが韓国キリスト教であり、「ネヴィアス方式（Nevius Plan）」の名と共によく知られる初期韓国キリスト教の特徴であった。「宣教する宗教・キリスト教」、韓国のキリスト教は草創期からそのことが信徒個々にまで浸透していた国であった。

「なぜ韓国はキリスト教を受容したのか」という問い以前に、まず「宣教する宗教」としてキリスト教が存したのである。その宗教が「宣教する宗教」であった故に、だから韓国

はその宗教に触れ、その宗教に接することができ、遂にはその宗教を受容することもできたのである。つまり、韓国キリスト教受容の最大枠の要因は、キリスト教自身の側にまず存していたのである。先の「受容の三要素（対象・主体・状況）」に照らして言えば、受容「対象」であるキリスト教自体の本質「宣教する宗教」のうちに、大前提とも言うべき形式的要因・二次的要因が存している点は、ともすれば見落しがちな点である。

【Ⅱ-2】アメリカ

「なぜ韓国はキリスト教国になったのか」。その理由・要因を求めることは決して易しくはなく、むしろきわめて困難な作業である。それが歴史的現象であるからには、歴史の中に分け入らなければならず、特に韓国キリスト教史という日本人には余りなじみのない歴史の森に一旦は深く入り込み、そこに身を置いてみないと、木も森も見えない。理由・要因として挙げうるものは、きわめて多く雑多であり、かつ諸要因が複合的に重複している。従ってこれらをまず全体的に総合化しなければならない。その上で、次にそれらの諸要因をその質と軽重に応じて分類する。ここで最終的に頼りになるのは作業者の歴史的判断力しかないのではなかろうか。例えば「経済学」の分野ではほとんど全てを数値化しうる「実証性」を備える（過去「なぜ韓国経済は成功したのか」という問が多く提出され、その解答はすでに出つくした）。これに対し「宗教、思想」という領域は、極端に実証性が低い。重要なのは「資料」であるが、草創期キリスト教に関する資料、特に韓国教会自身が残した資料が極端に少ない。⁽¹⁶⁾ 以上のごとき様々の困難さのゆえに、例えばある主要な要因を導き出したとしても、それが正鵠を得ているかどうかを検証するためには、かなりの時間と作業を必要とする。逆に言えば、かかる状況のゆえに、十分かつ総合的に検討することもせず、ある一つの要因を提示したとしても“もっともらしく聞こえる”。その典型的例の一つが、先の中村博士の場合だ。改めて引用してみたい。

「仏教国がキリスト教国に転向してしまった事例は、他には存在しない。アジアでも唯一の事例である。なぜそうなったか？ それは朝鮮戦争のとき、民衆が苦難に悩まされ、その生活が極度に疲弊していたために、アメリカの救援をたよりにし、感謝していたためである」（同、上掲）。

確かに朝鮮戦争（1950～53年）当時、李承晩政権下の韓国という国家も民衆も、連合軍の盟主であるアメリカを「たよりにし、感謝していた」のは事実であろうし、またその5年前、太平洋戦争で日本を破り植民地朝鮮を解放してくれたのもアメリカであった。従って、それらが韓国人一般へのアメリカへの好意を招き、さらには韓国人のキリスト教受容にとって何らかのプラス要因となったことは認めたい。つまり、韓国キリスト教受容の一

韓国における初期キリスト教受容の要因 [上]

つの要因となったことを否定するつもりはない。解放時と朝鮮戦争時、圧倒的多数の韓国人がアメリカに感謝したのも事実である。——しかしながら、それはアメリカという国の軍事力、政治力および経済力に対してであって、その国の主たる宗教に対する頼り・感謝であったわけではない。中村元の言うように「朝鮮戦争時のアメリカへの感謝」が、即、アメリカの宗教である「キリスト教」受容につながったとは考えにくく、もしそうであるならば、それにふさわしい証明が必要である（この証明に当たる叙述は中村元には全くなく、彼はただ唐突と「それは朝鮮戦争時のアメリカによる」と述べ、他のキリスト教受容要因についても一切言及しない。つまり、これが唯一の理由だと挙げるに等しい）。中村元の提示、あるいはこれに類する俗説に従うのであれば、戦後日本こそある意味では韓国以上に全くのアメリカ一辺倒。政治、経済、国家の安全と保障、それらすべてを日本は韓国以上にアメリカに頼り結果的にアメリカと一体化して来た。このようにして、アメリカの支援のもとに経済成長し、軍事的・政治的にもアメリカのもとで安全と民主主義を得たのだから、少なくともクリスチャンが10%前後ぐらいは存在してもよかつたはずではないか。

また中村元の指摘に従えば、朝鮮戦争時（あるいは解放時～朝鮮戦争時）を境にして韓国は「キリスト教化」したことになるが、しかし本稿の冒頭（『0』はじめに）に述べたように、すでに解放時や朝鮮戦争時よりはるか前に韓国キリスト教は「定着期」を終えてしまっているとするのが韓国キリスト教史の一般的見解であった。第0章で述べたことの反復になるが、1945～53年より以前、すでにキリスト教は草創期に「定着」しており、この基礎の上に立って解放～朝鮮戦争時（1945～1953）の「発展」、およびそれに続く1970～1990年の「大発展」が続く。とすれば、韓国キリスト教受容の真の要因は、「定着期」の歴史現象に求められるべきであろう。

中村元の指摘を離れて考察しても、そもそも韓国という国家とアメリカとの関係は、きわめて微妙であり、前者が後者に一方的に「感謝する」などという関係で捉えうるものではない。むしろ国家として、あるいは政治としてのアメリカは朝鮮半島に対しては基本的な無関心と、その故の伶俐さが一貫していると言える。1882年朝米修好通商条約が締結されるが、アメリカは当初から自国の船舶の安全のみが関心事であり、他の利権に関しては「朝鮮の経済的将来性はほとんど取るに足らない」そのため「朝鮮への関心は後退」し「朝鮮半島をめぐる政治的問題に介入する気にはならなかった」のである。⁽¹⁷⁾ アメリカの関心はむしろ、ハワイ、グアム、フィリピンであり、他方ロシアの南下であった。1898年米西戦争に勝利し、フィリピン、グアムを獲得し、同年ハワイ王国も自国に併合。「桂・タフト密約（1905）」に明らかのように、アメリカはこれらの優先権を自国に認めさせると交替に、朝鮮における日本の優先権を承認した。「私は、日本が韓国を手にするのを見たい。日本は

ロシアに対する牽制となるだろう」(1900年8月, 副大統領ルーズベルトの手紙から⁽¹⁸⁾)。「桂・タフト密約」が結ばれた同1905年には, 第2次日英同盟を結んだイギリスは, 日本が韓国を「指導, 監理及保護」することを承認。韓国が日本の保護国とされ, 伊藤博文が韓国統督府初代統督に任命されたのは同年1905年12月21日のことであった。日本による朝鮮支配は, いわばアメリカとイギリスという「キリスト教国」の「お墨付き」だったのである。そのための準備段階の総仕上げが1904年の日露戦争であったが, 同戦争のために軍事費として使った17億円のうち8億円が, ロンドンとニューヨークで外債を募集してまかなわれている⁽¹⁹⁾。

また, 1945年の日帝植民地からの解放をアメリカのおかげだと当初韓国人は歓喜した。しかし, 続く38度線南北分割と, 1945年から48年まで3年間は日本に代わってアメリカ軍による支配が続いた。これを米軍政時代と言い, 韓国が独立国家を打ち立てたのは1948年夏のことであった。南北分割が米ソ大国間の見えない戦争のせいであることに韓国人は気付いていく。民衆神学者としてよく知られる安炳茂(アン・ピョンム)は1946年に北から南のソウルまで行った時の経験を, 次のようにしている。「ソ連軍が進駐するや解放軍が来たと誰もがプラカードを作って手にとり, 出ていって迎えたりしましたが, 奴らがやってくるなり, 婦女子を強姦するのを見ては, 結局解放となっても力のない民族はやられるだけなんだという悲劇的な現実絶望し, 間島を去って豆満江を泣きながら渡ってきました。……(中略)……。辛うじてソウルに到着し, 今度は生きられると思ったのに, 米国の軍人たちが韓国人を人間らしく取り扱わず, 豚のように扱うことに対して, 恥辱をこらえきれませんでした」⁽²⁰⁾。これに類する話は, 実に多い。また1950年の朝鮮戦争とは, 米ソが勝手に設定した38度線をめぐる米ソ両国の戦争を南北が行なうという「代理戦争」にすぎない。「アメリカに感謝する」どころか, むしろアメリカ(およびソ連・中国)という東西両陣営の犠牲者にすぎないのである。朝鮮戦争時, アメリカが韓国にとっての恩人と思えたのは, ほんの一時のことである。なぜなら, それはアメリカが蒔いた種をアメリカ刈り取ったにすぎないからだ。特に朝鮮半島を北緯38度で分割しようという提案は, アメリカからソ連に対してなされたもので, 当時沖繩戦線に居たためソ連の南下に先を越された時, 二人の米青年将校が提案した案が米軍・米政府の支持とソ連の同意によって決定したものである。ちなみに, そのうちの一人が後にケネディー, ジョンソン両大統領の下で国務長官を務めたラスク長官である⁽²¹⁾。

以上の事実は, 草創期のキリスト教会, 特にアメリカ人宣教師たちに深刻な制約とジレンマを与えていったと思われる。本国アメリカの政策と基本姿勢は, 朝鮮半島に対する無関心と冷淡さに加え, 日本による韓国支配を承認している。宣教師たちは, 医療・教育・福音伝道を宣教地韓国で良心的に行おうとしていた。しかも韓国教会は時と共に, 反日民

韓国における初期キリスト教受容の要因 [上]

族運動との結びつきを強くしてゆく。多くの宣教師は日本による韓国支配を基本的に肯定せざるをえず、しかも予測した以上に日本人は韓国人に対して苛酷で残虐であり、日本による統治が新しい韓国を作るであろうと期待していた宣教師たちは、現実的には反日化してゆく。しかし本国の政策が上のごとくである以上、彼らは抗日化するわけにもゆかない。教会が日帝に対抗する抵抗勢力になろうとすればする程、たとえ心情的にはどうであれ、結局宣教師たちは韓国教会と一線を画す存在になる者でしかなかった。そして、キリスト教信仰本来の道は政治への不干渉・不参加にあると教え、従って祈りや霊的な個人の救いを強調するという方向にむかう。これは宣教師たちが個人的に良いとか悪いとかいう問題をこえ、いわば構造的に与えられた歴史的・政治枠の結果である。——つまりここで私が言いたいのは、「政治としてのアメリカ」のみではなく、草創期における「宣教としてのアメリカ」も、果してどれだけ韓国キリスト教受容の要因となりえたのか、ということである。確かに宣教師たちは、韓国にキリスト教を伝え、医学、教育他の文化文明を伝えた。しかし、アレン、アンダーウッド、アペンゼラー以下、宣教師たちと韓国教会との関係と距離は、従来考えてこられたよりもはるかに「遠かった」のではないのか。逆説的ではあるが、かかる構造的ジレンマを抱える宣教師たちにとって、自主・自立を強調する「ネヴィアス方式」を韓国教会の基本姿勢として選択させたことは、彼らの智恵ではなかったのかとさえ思われる。つまり上の「宣教師ジレンマ論」を前提にすれば、別にネヴィアス方式など存在しなくても、韓国という地に生まれたキリスト教は、はじめから自主・自立および土着化の道を、韓国人自身の足で歩むように構造的に定められていたと言えるからである。

本節のタイトル「アメリカ」とは、以上のごとく政治としてのアメリカのみならず、宣教としてのアメリカを含め、この両者が二次的要因であったと判断せざるをえない点を結論とするものである。

【Ⅱ-3】 侵略者とキリスト教受容

中国をはじめとするアジアの国々を侵略・植民地化したのは、イギリスほか欧米キリスト教諸国であった。そのため中国はじめアジア諸国では、侵略者の宗教キリスト教に対する敵対視が生じ、キリスト教受容がなされにくかった。これに対し韓国を侵略・植民地化したのは、非キリスト教国・日本という天皇制神道国家であった。従って他のアジアの国々とは異なり、韓国ではキリスト教は基本的に受容されやすい宗教であった。この点が韓国キリスト教受容の要因だと言える。——この節での考察課題は以上の点、すなわち「侵略者とキリスト教受容の関係」と言ってもよい。

まず私たちは、上の点は何らかの形で韓国キリスト教受容の要因を形成したであろうことを認めなければならない。もし仮に「日本」ではなく、キリスト教国「アメリカ」が韓国を取奪し、苛酷な植民政策を実行していたとしたら、果してあの独立心と自尊心に満ちた韓国人がキリスト教を受容していたであろうか？ 答えは“No!”である。つまり、「非キリスト教国日本による植民地支配」と、韓国における「キリスト教受容」との間には、何らの因果関係を認めないわけにはいかず、その限り、前者は後者への要因の一を形成していることとなる。——しかしながら、それは主たる要因・一次的要因であるとは判断しえない。むしろ二次的要因、副次的要因であると判断しなければならないであろう。なぜか？ なぜ二次要因か？ 実はこの点を明らかにするため、私たちは本節で以下の2点を検討しておかなければならない。それは「台湾」の場合と、「フィリピン」の場合である。

〈1〉、台湾の場合。周知のごとくアジア諸国のなかで、非キリスト教国・日本によって植民地化されたのは韓国だけではなく「台湾」も同様であった。むしろ台湾植民地化のほうが15年も早かった。日清戦争の勝利（1895年）に伴い、台湾を割譲され、同年台湾総督府が設置、後藤新平が活躍したり、第三代総督には乃木希典が任命されたりしている。日本の植民地はこの二国しかない。ならば同じ理由、つまり「非キリスト教国日本による植民地化」を理由にして、当然ながら台湾もキリスト教受容を果たしているはずである。にもかかわらず、台湾にキリスト教が受け入れられ定着化したことはない。1895年のキリスト教（カトリック、プロテスタント）人口は約9,900名にすぎず、当時人口300万に対し0.3%にしかない。1930年には日本人キリスト者を除くと44,700名、人口460万に対し0.9%、解放30年後1975年に至っても615,227名、人口1,600万に対し3%台のままである。⁽²²⁾

等しく日本の植民地という歴史を歩みながら、どうして一方はキリスト教を受容し、他方はそうはならなかったのか。それは簡単なことである。受容「主体」である両国の固有文化・歴史が全く異なるからである。むしろ、キリスト教受容という私たちの視点から見た場合、両者の共通点は共にアジアに位置する点、および共に日本植民地であったという点だけであり、受容主体としての両者は他の点ではあまりにも異なっていると言うべきであろう。

第一に、台湾は「国家としての歴史」がきわめて浅く、12世紀になってはじめて中国本土に知られるようになり、その時から漢民族の移住がなされるが17世紀初頭の人口は16万人にすぎない。それが18世紀初頭には200万人にふくれあがり、1900年頃の日本による最初の戸口調査によれば人口約300万人で、そのほとんどが移住漢民族であり、原住民高砂族系は11万余にすぎなかった。つまり「国家としての台湾の歴史」は17世紀代というきわめて遅い時代に始まるのであって、しかもその後の人口も中国からの移住者で占め

られており、この点が韓国の場合と根本的に異なる。

第二に、その17世紀以降も、「独立国」とは言えず打ち続く外国侵略と支配が継続し、1945年に至ってやっと独立国家となった。つまり17世紀代にはオランダ、スペインによる占領、および日本人を母として平戸に生まれた有名な国姓爺・鄭成功による支配と、同一族が清に敗れてからは17世紀後半から1895年日清戦争までの300年以上は清帝国の統治下にあり、その後は1945年日本敗戦まで約50年間日本の植民地であった。つまり台湾は、国家としての歴史が残い点に加え、その国家も長く独立国家とは言えない状態にあった。韓国と比べると、両国の「歴史」は根本的に異なる。

第三に、民族の多様性、特にそれに伴う言語の多様性がある。大別すれば三つの言語があり、原住民の言語、漢民族「客家」の広東語、同じく漢民族「福佬人」の福建南部方言である。三言語はそれぞれ外国語と同じだと思えばよいようで、しかも原住民の言語も一つではないと言う。この点は私たちのテーマであるキリスト教受容にとっては、宣教する言語の分割、および聖書の翻訳を中心とする出版宣教などに予想以上の様々の困難を伴った。

第四に、台湾におけるプロテスタント初期宣教（1895～1930年）に関して言えば、イギリス長老系、カナダ長老系の宣教が中心で、アメリカによる宣教を欠くうえに、宣教師の数も平均30名程しかいない。この点も韓国における宣教の強力さに比べれば、はるかに弱い。⁽²³⁾

以上のごとく、受容要因というものはその国固有の歴史、政治、社会、文化と深くかかわって、しかもそれと総合的かつ重層的に関係しあいながら形成されるものであり、単に「非キリスト教国日本による植民地化」という一つの歴史上の偶然的一致点からのみ決定されうるものなどではないということが理解できよう。つまり、同じ一つの歴史的契機が与えられても、その契機が次に受容につながるか否かを決定するのは、受容「主体」者自身であるということである。この点をよく検討しておかないと大変な誤謬におちいる⁽²⁴⁾。

〈2〉、フィリピン。まず本節における以上までの論述を再確認しておこう。韓国はアジアでは例外的なキリスト教となったが、その要因の一つはアジアでは例外的に非キリスト教国日本によって植民地化された点に存す。しかしそれは単に二次的・副次的要因あるいは「契機」ではあっても、主たる一次的要因とは認められない。なぜなら、その点では全く同一の歴史を歩んだ日本植民地「台湾」の場合が教えてくれるように、主たる一次的要因は、受容「主体」である韓国あるいは台湾自体の固有文化や歴史性・民族性に求められる。その故に、同じく非キリスト教国日本の植民地でありながら一方はキリスト教を受容し、他方は受容しなかった。台湾のケースがそれを教示してくれた。

同様に「フィリピン」の場合も、上と類似の点を教示してくれる。実はフィリピンはア

ジアにあって最も注目すべきキリスト教国である。フィリピンの宗教人口分布（1983年）によれば、総人口5,200万人のうち、実に90%がカトリックによって占められており、プロテスタントは3～4%、残りの5～6%がイスラム教となっている⁽²⁵⁾。フィリピンこそは、アジアの最たるカトリック国、キリスト教国であり、首都マニラはマカオ（ポルトガル領）などと共に16～7世紀のカトリック東洋宣教の本拠地であり、日本や中国への宣教もここを拠点になされた。1614年家康が高山右近ほか信徒400名を流罪として追放した地も、このマニラ、マカオであった。当時のカトリック宣教とは、いわゆる大航海時代の先頭を進むスペイン、ポルトガルの国家的目的である新航路上の民族・国家の征服植民化、貿易と、他方では反宗教改革を掲げ世界布教を目的とするカトリックとの、この両者の目的の一致上に展開されたものであった。従って「当時の布教事業は、本質的に両国王室による武力征服事業と併行して進められてゆく性格のもの」「両国の国家的な利害と一致する」ものであり、また「スペイン、ポルトガル両国民がその大航海事業の最後に到達した、日本或いはシナの布教」であったのである。⁽²⁶⁾

上からも明らかなごとく、フィリピンがカトリック宣教されたのはすでに16世紀のことであり、その宣教が“最後に到達した地”日本にまで及んだ。フィリピンは1500年代中葉から1898年アメリカに植民化されるまでの約340年もの間、スペインに支配され植民地とされ続け、スペイン王の許可する5つの修道会（アウグスティヌス会、イエズス会、フランシスコ会、ドミニコ会、アウグスティーノ・レコレクト会）はスペイン王室の有す軍事力と征服目的とを背後に布教し続け、1860年頃にはすでにその宣教は完了していたと言われるほどであった。（なおその後、1898年から1941年太平洋戦争開始に伴い日本軍の恐怖の支配が始まるまでの43年間はアメリカの植民地であった。フィリピンの歴史も植民地化に続く植民地化の歴史であった）。⁽²⁷⁾

以上から言えることは、フィリピンのごとく「侵略者の宗教を受け容れる」場合もあるということである。従って、韓国キリスト教受容の要因に「非キリスト教国日本による侵略・植民化」を挙げるとしても、それはどこまでも二次的・副次的要因にとどめるべきである、というのがここでの結論である。

ただ上の結論以上に重要な点は、19世紀帝国主義時代のキリスト教宣教と、16世紀植民化時代のカトリック宣教との間には、明確な歴史的差違が存在するという点である。特に16世紀カトリック宣教の場合には、侵略者との一種の連係プレイによって宣教事業が行なわれ、他方スペイン、ポルトガル王室の側は宣教事業に経済的援助を与えつつ、同時に本来の目的である航路開発と征服・植民化および交易を武力によって実現していった。カトリック宣教側も、まず武力征服したのち、次にそこを宣教しキリスト教化する方が理にかなっていると判断していた。まさしく、フィリピンの場合がそうであったように。そこで

は、武力侵略された者は、その武力侵略と最初からセットになっている宣教によって、必然的に侵略者の宗教を受け容れるように計画されており、その計画進行にも国家の軍事力が協力して控えていたのである。上掲、高瀬弘一郎によれば、16世紀日本宣教に先だってもカトリック内部では、まず日本をスペインの圧倒的武力で征服したのち宣教を行なうべきか否かについて真剣な論議がなされたことを伝えている⁽²⁸⁾。本稿〈註3〉に挙げた「黄嗣永帛書」に“(カトリック諸国が) 軍船数百隻に兵5～6万と大砲軍事物資を載せ、もってわが国・朝鮮を滅ぼし、信教の自由を与えさせよ”と記しているのも、きわめて現実性に富むこととして理解しなければならない。一口に侵略、植民化と言っても16世紀と19世紀とは異なる。同様一口に宣教、布教と言っても16世紀と19世紀では異なる。

【Ⅱ-4】韓国教会人の回答

「なぜ韓国だけが、これ程のキリスト教となったのか」この問いを韓国の人々に直接尋ねてみると、ほとんどの人が「よく分からない」と答える。一部の人は、先に言った「アメリカ」を理由にあげたりあるいは農村社会の相互扶助制度を教会に持ち込んだのが成功因だと言う人もいる。しかし、教会人、それも牧師・長老あるいは神学生、伝道師といった自覚的キリスト者の回答は、次の2点においてきわめて類似的である点は注目に価する。まず上の問に対し、かならずと言ってよいほど牧師・長老たちは「なぜ日本は、そんなにキリスト者が少ないのか」と真剣に問い返す点である。文化・宗教という現象の相対性を、改めて知らされる。つまり彼らの方も、この問いの中に、日本という国の本質が隠されていると考えているのである。第二に、上の問いに対する彼らの回答はまるで判を押したように類似的、同一的である。その内容をあえて要約してみると、以下のようになる。

苦難の歴史を歩んだユダヤ人・イスラエルの民は、神の前に過ちばかり繰り返した。しかし神は、その民を「神の民」すなわち「選民」として選んだ。同じように外国の侵略ばかりを受け続けて来た苦難の民、さして秀れてもいない欠点の多い韓国人・韓民族を神が選ばれたのだ。

ここには3つのポイントと、いくつかのキーワードが存すのに気付く。まず第一は、「ユダヤ人・イスラエルの民」と「韓国人・韓民族」を同列に並べる点。第二に、その両者が共に「苦難」の歴史を歩んだ点に共通点・同列化の根拠を求める点。第三に、その「苦難」の両民族は、神の一方的な「選び」によって選ばれたのだ、と結論づけるのである。これら三点を以下、二点に分けて検討してゆきたい。

まず第一に、結論すなわち神の一方的な「選び」に、韓国キリスト教受容の要因を求めるところから検討したい。一般に、ある歴史的現象を「神の意志」や「神の選び」に根拠を求めるといったことは、キリスト教界では決して特別なことではない。例えば日本人のなかでも、内村鑑三はほぼこれと同じ主張、つまり「神の選び」に韓国キリスト教受容の主要な要因を見出す主張をしている。この点を少し見ておきたいが、内村は1894年の日清戦争では積極的な義戦論（参戦論）者として立ち“Justification of Corean War”を英文で書き、同年「日清戦争の義」として邦訳される。その中で内村は言う、“遅れた朝鮮に進んだ文化を教え、朝鮮の民を開化し導くのは中国・清のないうところではなく、それは東洋にあって唯一進歩国である日本の役割、日本の使命「日本の天職」である”と。当時かかる進歩観に根ざした朝鮮教化論（朝鮮支配論）は、内村であれ福沢諭吉であれ日本の知識者に一般的な見解であった。ただし内村の場合は“朝鮮はキリスト教の伝播発達が著しく遅れている。清国も同様である。従って、アジアにおけるキリスト教先進国である日本が、朝鮮にキリスト教を伝える使命を負う”という、あくまでもキリスト教を基軸とした朝鮮教化論であった。

ところが日露戦争（ここでは内村は絶対反戦論者として立つ）を経て、1909年の内村はこれが大変な間違いであったのに気づき次のように記している。「神はかえって朝鮮を救いて、日本を棄て給うたのではあるまいか」「余輩（私）はこのことを思いて、精神的に暗愚なる日本を去って、自らも外国宣教師の一人となりて、その教化を助けようと思った」（いずれも『聖書之研究』1909年12月号、一部現代語化）。ここには、かつての内村はいない。むしろ日本を「暗愚」と断じ、“神は日本を捨て、かえって朝鮮を救い、朝鮮を選ばれたのではないか”と言っているのである。その後の内村は、自分の「真の後継者」はむしろ朝鮮の友や弟子たちであろうという発言をしばしばなすようになる。彼の友・弟子とは、後の韓国キリスト教の偉大なる精神的指導者、金教臣（キム・ギョーシン）、金貞植（キム・ジョンシク）、咸錫憲（ハム・ソクホン）たちであり韓国無教会の創設者たちであった。⁽²⁹⁾

「なぜ韓国はキリスト教を受容したのか」。この問いに対し、現代の韓国教会の自覚的キリスト者の多くも、また1909年の内村鑑三も、等しくその要因を「神の選び」に求めているのである。もとより、かかる見解は私たちが本稿で求めているものとは基本的に土壤自体が異なっており、従ってこれを受容要因とすることはできない。しかし、1909年といういまだ2%前後しかキリスト者がいなかった韓国キリスト教の草創期において、のちの韓国キリスト教の隆盛と、のちの日本キリスト教の衰退とを鋭く洞察している預言者・内村は注目に値するであろう。

ここから私たちの考察は、先に述べた第二の点に移る。すなわち、先の韓国の自覚的キリスト者たちは「なぜ韓国はキリスト教国になったのか」という《問い》と、《結論》「神

による一方的選び」との間に、2つの前提事項を置いた。①「ユダヤ人・イスラエルの民」と「韓国人・韓民族」を同列化し、②両者の共通点を「苦難」に見出し、その上で両民族を「神が選んだ」というのが彼らの回答であったが、私はむしろ①、②の方に重要な意味があるように思えてならない。つまり、なぜ彼らは端的に「それは神の選びの故だ」とだけ答えず、わざわざ①、②を置くのであろうか。キーワード、「イスラエル、ユダヤ人」、「苦難」とは具体的に何を意味しているのであろうか。

「民衆神学」の提唱者の一人として知られる安炳茂（アン・ピョンム）博士（故人）は、1920年代間島（現、延辺地区）での幼少期を回顧しながら、次のように述べる。⁽³⁰⁾

「間島では毎年クリスマスになると教会でモーセの劇をします。“おおイスラエル民族の太陽よ”と、絶叫するように民族の指導者モーセを賛美し、また祖国を求めて闘ったエステルを劇化したりもしました。クリスマスの度ごとに旧約聖書から民族解放の主題をとりあげて演劇をし、民族解放闘争の指導者であるモーセの劇をして、民族的な願いをそこに表現したのです」。

世界どこであれ、クリスマス教会劇と言えばイエス誕生の「降誕劇」と相場が決っている。著名なドイツ人神学者オスカー・クルマン『クリスマスの起源』によると、クリスマス教会劇が開始した頃のヨーロッパ中世ではアダムとエヴァの「楽園追放物語」がしばしば演じられた点が報じられているが⁽³¹⁾、それはパウロがイエスのことを「新しいアダム」と規定（ローマ書、5章）したことによる。いずれにしろ、イエス誕生を祭るクリスマスに「モーセの出エジプト劇」を演じた教会は、まずないであろう。なぜモーセか。モーセこそは、エジプト支配下に奴隷とされていたイスラエルの民を解放した人物だったからである。韓国の教会は、モーセ劇の上に、エジプトならぬ日本帝国による支配からの解放を託し、クリスマス劇においてさえ演じていたのである。従って「苦難」とは、他の苦しみのことではなく、外国に侵略され国を失った苦しみの意である。韓国教会が自らと同列化するイスラエルとは、ダビデやソロモン時代の華々しいイスラエル王国ではなく、エジプト、アッシリア、バビロニアによって支配されたエレミヤやイザヤの時代のイスラエルであり、またローマ帝国によって植民地化されたイエス時代のイスラエルのことであった。初期キリスト教時代の韓国民と教会は、日本帝国支配下にある自国の姿を外ならぬ「聖書」と「キリスト教」の中に発見し、驚き、また共感した。国を奪われ、国土を収奪され、民を奪われた「苦難」を嘆き、その苦難を通して知る自国への愛と独立解放への強い祈念と闘い。これらを「民族主義」と称しうるのであれば、韓国教会は草創期からこの「民族主義」と「キリスト教」の一致あるいは同列化より始ったのである。それがすなわち、「苦難の民イスラエル」と「韓民族」との同列化にはかならない。現代の韓国キリスト教会人も、その教会の伝統を忘れてはいないのであるからこそ、韓国キリスト教隆盛の要因・根拠をまず①「イ

スラエルの民」と自らを同列化し、②両者の共通点を侵略された者の「苦難」に置き、その上ではじめて③神の一方的選びを回答するのである。重要なのは、むしろ①、②であると判断できよう。安柄茂博士は次のようにも言う。

「教会というのは本当に驚くべきところでした。小学校から受けてきた日本式教育によって死んだ民族意識が甦るところが教会でした。早天祈祷会の時には必ず独立のために祈祷し、聖書解釈をする時にも、祖国の独立を念願し、民族意識を目覚めさせる側からしていました。例えば使徒言行録に“主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか”（使1：6）という題目がでると“主よ、朝鮮が建て直されるのは、この時ですか”というように解釈をするんです。教会に熱心に参加し、民族意識が甦り、わが民族が本当に日本人どもに国を奪われてしまったんだな、ということをはっきりと理解するようになりました」。

「ここで一つ強調しておきたいことは、民族主義とキリスト教は決して分離して考えることはできないということです。韓国教会はその成立の時から民族的キリスト教であり、愛国的キリスト教でありました。韓国のキリスト教を見る場合、そういった視角から見ないと絶対に正しく捉えられないのです。⁽³²⁾

上の点、すなわち「初期韓国キリスト教と民族主義」の関係は、韓国キリスト教受容にとってきわめて重要な要因を形成するゆえ、次章第三章「一次的要因」のなかで継続して論じる予定である。なお、上述した「ユダヤ人」との同列化、つまり「イスラエル民族」のみではなく「ユダヤ人」とも韓国人を同列化する点については、李仁夏「植民地下朝鮮のキリスト教」参照⁽³³⁾。

(第三章以降、[下]に収録)

註

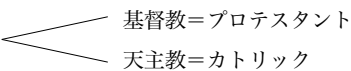
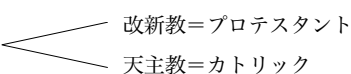
(1) 韓国語でも「キリスト教」には、漢字語「基督教」をあて、これを「キドッキョ・기독교」と発音およびハングル表記する。しかしながら、その意味と使い方は日本語とは、かなり異なる。特に、日常言語では一般に「基督教」と言えば、プロテスタント（新教）を意味する。カトリック（旧教）は別の語「天主教、チョンジュギョ・천주교」を用いる。同様、日常言語では「教会・Church」を表す語も、プロテスタントでは「教会、교회・キョーフエ」を用いるが、カトリックでは「聖堂、성당・ソンダン」を用いる。従って、次のような会話にしばしば遭遇する。

- 「あなたは、基督教ですか？」——いいえ、私は天主教です。
- 「教会に通っていますか？」——いいえ、聖堂に通っています。

韓国における初期キリスト教受容の要因 [上]

ただし、日常語ではなく専門用語としては、「基督教」はプロテスタント、カトリック両者を含む意味でも用いられる。この場合にはプロテスタントを表す固有語が別途必要となり、それを「改新教、ケシギョ・개신교」と表記、発音する。

要約すると以下のごとくなる。

- ① 日常言語……… ∅ 
- ② 専門的………基督教 

一般に「韓国基督教史」と言えば、②の用法で用いることが多い。

(2) 李萬烈『韓国キリスト教受容史研究』Seoul, ツウレンデ出版社, 1998, 所収「第3部, キリスト教の定着過程」p. 285以下, 参照。(이만열『한국 기독교 수용사 연구』두레시대, 1998)。

(3) 黄嗣永(ファン・サヨン)は、1801年の辛酉教難(辛酉迫害)時に殉教した両班・カトリック信徒。最近ユネスコ世界遺産に指定された水原「華城」を設計建築した茶山・丁若鏞(チョン・ヤギョン)の実弟・丁若鍾(チョン・ヤクジョン)の娘婿に当たる。茶山の一族はカトリック信徒が多く、当時は実学(実用学)と西学(西洋の学・カトリック)の結合が強かった。黄嗣永は上記迫害の逃亡中、北京駐在主教宛に「帛書(ペクソ)」、つまり白い絹織物に13,000字ほどの漢字漢文をしるした手紙を使者に託して密送しようとした。これは警備兵に発見され、同年9月黄嗣永も捕われるが、その「帛書」の内容、特に最後の部分は朝野を問わず朝鮮中に強い衝撃を与えた。“朝鮮の軍力は最低であり、政治も乱れている故、(カトリック諸国が)軍船数百隻に兵5～6万と大砲軍事物資を載せ、もってわが国、朝鮮を滅ぼし、信教の自由を与えさせよ”と建議していたからである。周知のごとく、秀吉による壬辰倭乱(文禄・慶長の役)、清による丙子胡乱などの外国の軍事侵略によって、過去朝鮮は滅国の瀬戸際に立たされ続けてきたのであった。従って、黄嗣永の上の建議は、国家にとっても、国民にとってもこれにまさる売国・謀反はないと言えるほどの憎むべき大罪であった。この事件を契機に、王朝は改めてカトリック弾圧の正統性を認識し迫害の手をますます強め、庶民もカトリックに対して一層の不信と憎悪の火をいだくようになった。つまり、カトリック不受容の大きい原因となった。

なお、黄嗣永帛書の漢文原文は〈山口正之『ローマ法皇庁古文書館所蔵：黄嗣永帛書の研究』全国書房, 1946) 巻末収録を参照。また同日本語文語訳は〈山口正之『朝鮮西教史, 朝鮮キリスト教の文化史的研究』雄山閣, 1967) p. 236～260, 参照。

(4) 閔庚培(ミン・ギョンベ)(金忠一訳)『韓国キリスト教会史』新教出版社, 1981, 「日本語版への序文」参照。なお同書韓国語原典版は、1993年に「改訂新版」が出版され、内容の増補改訂と新資料による増補がなされた。しかも大々的な大幅改訂であり、まるごと追加された節は20前後に及び、1つの章ほとんどが追加された部分もあるほどである。上記、新教出版社、邦訳版はまずこの点ですでに古いこと、また元々原典には存している「索引(INDEX)」を削除している点など制約と不便に加え、数字や年次にまでも及ぶ深刻な誤植・まちがいが存す。原典〈閔庚培『新改訂版：韓国基督教会史』Seoul, 延世大学校出版局, 1993)。

(5) ○「円仏教」とは20世紀初頭、朴重彬によって創唱された新仏教。

○「天道教」は、19世紀中頃崔濟愚によって創唱された民族運動かつ民族宗教「東学」に由来し、

のち崔時亨、孫秉熙に継がれ「天道教」と改名され、教典・教理・教団組織が整備された。なお「東学」とは北学（北の中国の学）、西学（西洋の学、カトリック）に対して東洋本来の学の意。

○「大倣教（テジョンギョ、だいそうきょう）」とは「檀君教」とも称され、朝鮮民族になじみの深い檀君神話に基づき、1909年羅喆（ナ・チョル）が民族的危機を克服する目的のためにつくった宗教。

- (6) 강근환 『한국교회의 형성과 그 요인의 역사적분석』, 대한기독교서회, 2004, p. 25, 参照。なお姜グンファン教授の統計には、カトリック人口とプロテスタントを合計した「全キリスト教人口」の項目はパーセンテージのみ記載されていて人数は書かれていない。また、一点のみ数字の明らかな誤植があるので訂正した（1920年、全キリスト者人口のパーセンテージが「2.72%」となっていた）。

なお、こうした「宗教人口統計」は、あくまでも大体の流れを示す数値として理解しなければならない。例えば「キリスト者」と言っても、カトリックのごとくバチカンに登録されている受洗者を数値化する場合もあれば、あるいは《表1》のごとく国勢調査の場合もある。《表1》の国勢調査には、実は私自身も居住外国人として参加・記入したのであるが、「あなたは、何の宗教を信じていますか」という記入者自身の判断にまかされるものであったりするからである。それでもキリスト教の場合は、受洗とか教会に毎週行く、などの宗教自覚基準が明白であるが、例えば仏教の場合、特に檀家制などもない諸外国の調査には根本的な困難がともなう。

- (7) この時期、「草創期」は本稿にとっては特に重要であるので、以下を補っておきたい。草創期韓国キリスト教の足跡をしるした資料、C. A. Clark, *The Korean Church and the Nevius Methods*, New York, Fleming H. Revell Company. 1928. (C. A. クラーク『韓国教会とネヴィアス方式』), p. 154～5では、アメリカ北長老教会ミッションが1909年に韓国宣教開始25周年記念を開き、1884～1909年までの25年間を回顧要約している。同ミッションに属す、Moffett, Allen, Underwood, Baird, Miss Margaretの名も並ぶ。それによると、同教派だけの1897年までの受洗者は530人であること、それが1909年には総計26,057人になったことが報じられている。また同年、同ミッションによる学校の教員 (School teacher) 数が745人であること。同年同ミッションに属した俗人福音伝道者 (evangelist) が307人おり、その給与の94%を韓国教会が支払っていることなども報じられている。

- (8) 日本では1873 (明治6) 年「キリシタン禁令の高札撤去」が明治政府によってなされた。しかし朝鮮時代末期、そのような明確な解禁令は出されていない。そのため、いつからキリスト教宣教が実質的に認められたのか、という点はいまいである。1882年、朝鮮はアメリカ、イギリス、ドイツと、それぞれ修好条約を結ぶ。この時点が一つの節目にはなるが、しかし同条約では「宣教の自由」は明文化されておらず、それどころか当時国王・高宗をはじめとする政権側が同条約締結に際し、もっとも警戒し注意を払ったのはキリスト教に対してであった (李光麟「開化派の改新教観」; 所収『韓, 第81号 (第7巻, 第11・12合併号)』韓国研究院, 1978, 参照)。そのため、例えば1888年4月にも「伝道禁止令」が公布され、アンダーウッドなども伝道を中止したことがあったりする (閔庚培『韓国基督教教会史』延世大学校出版部, 1993, p. 177, 参照)。従って、実質的な解禁は1890年代と見るのがよいであろう。

- (9) 一般に、カトリックの両国への宣教開始年は、日本の場合はF・ザビエル来日の1549年、韓国は最初の受洗者・李承薫が中国・北京で受洗した年、1784年とされる。プロテスタントのほうは、日本は1873 (明治6) 年、キリシタン禁令の高札撤去と、それに伴い同年数名の宣教師が来日した。韓国の場合は、すでに述べたように1885年、アンダーウッドとアペンゼラー、2名のアメリカ人宣教師来韓の年とされる。

韓国における初期キリスト教受容の要因 [上]

- (10) 『キリスト教年鑑, 2001年』キリスト教新聞社, 同別冊『特集, 記録・声明文』p. 108, 参照。なお《表3》は, 同『キリスト教年鑑2001年』より, キリスト教人口が0.4%~0.8%になった年度のみを抽出した。
- (11) 『中村元選集, 第4巻: 東洋人の思惟方法IV, チベット人・韓国人の思惟方法』春秋社, 1989, p. 220, 参照。
- (12) 関庚培『韓国基督教会史』延世大学校出版部, 1993, 「巻頭言」参照。
- (13) 《表4》《表5》は, いずれも『2000年版, ブリタニカ国際年鑑』を基に『キリスト教年鑑, 2001年』キリスト教新聞社が, まとめたものである。同, 別冊, p. 100~参照。
- (14) 古屋安雄「世界のキリスト教と日本のキリスト教」; 所収同『日本のキリスト教』教文館, 2003, p. 29~参照。著者は元, 国際キリスト教大学教授, 牧師, 専攻・神織神学, 宗教学。
- なお, 古屋の上記参照箇所には“21世紀になって, はじめてこの逆転が生じた”というニュアンスと認識があるが, しかしながら村上重良『世界宗教事典』講談社, 1987, は『1987年版, ブリタニカ国際年鑑』を資料として, あげており, それによると次のようになる。1986年(調査年), キリスト教人口は約16億で第一位, 人口比33%(33%は2000年度と同じである), うち欧米系は7億7千万・47.5%, 非欧米系は8億5千万・52.4%。つまり, すでに1986年には古屋の言う「逆転」がなされているのである。なお補足すれば, 1986年では仏教は四位, 中国系民間信仰は五位となっており, 2000年にはこの2者の順位が逆転している(同上, 村上重良, p. 317~319, 参照)。
- (15) 韓国基督教歴史研究所, 金承台, 他編『資料叢書, 第18集, 来韓宣教師総覧1884~1984: 附“The Korean Mission Field”執筆別目録索引, (修正増補版)』Seoul, 韓国基督教歴史研究所, 1996, p. 4~参照。(김승태 엮음 『자료총서 제18집, 대한 선교사 총람, 1884~1984』, 한국기독교역사연구소, 1996)
- (16) 例えば日韓共同作成した, 合計1400頁(各頁, 上下2段割)を越える大著〈資料集『日韓キリスト教関係史資料, I, 1876~1922』『同, II, 1923~1945』新教出版社, 1984, 1995)においても韓国側資料は第II巻の後半約470頁分しかなく, しかも1920年以降の資料(「草創期, 1885~1910ごろ」の資料は一切ない)である上に, 一般新聞の記事を多く含む。これに対し, 同日本側の資料は4倍の量であるのに加え, 当時各キリスト教流派教会の直接の声を伝える教会機関誌のみを資料としているという資料的余裕を見せている。
- 草創期前半においては, いまだキリスト教は公的には解禁されておらず, それに続く時代は, キリスト教を朝鮮植民地化の最大の支障とみなした日帝による厳しい警戒と検閲の対象となった点などが, その理由であろう。治外法権を有していた宣教師たちの資料は比較的多いが, 彼らの資料には本国報告義務による美化や正当化, 誇張の傾向性と可能性があり, かつ日帝支配を肯定せざるをえない政治的立場にいた彼らが, どれだけ当時韓国人・朝鮮人キリスト者の立場を共有していたかは疑問が残る。
- (17) いずれも, 長田彰文『セオドア・ルーズベルトと韓国—韓国保護国化と米国—(朝鮮近代史研究双書, 11)』未来社, 1992, p. 15, およびp. 21~22, 参照。
- (18) 長田彰文, 前掲書, p. 23, (重引), 参照。
- (19) 姜在彦『日本による朝鮮支配の40年』朝日新聞社, 1992, p. 28 参照。
- (20) 安炳茂(趙容来, 桂川潤訳)『民衆神学を語る』新教出版社, 1992, p. 25~26, 参照。
- (21) 以上については尹景徹『分断後の韓国政治』木鐸社, 1986, 第1章 参照。
- (22) 鄭兪玉(吉田寅訳)「台湾のキリスト教」; 所収, 土肥昭夫他『アジア・キリスト教史(1), 中国・

台湾・韓国・日本』教文館, 1981, p. 68～111, 参照。

- (23) 以上については、杉本幹夫『データから見た、日本統治下の台湾・朝鮮・フィリピン』龍溪書房, 1970, 第5章および終章; 蔡錦堂『日本帝国主義下台湾の宗教政策』同成社, 1994, 第1章; 笠野・植野『アジア読本, 台湾』河出書房新社, 1995, p. 12～52, p. 238～268; 鄭兪玉, 上掲書, p. 68～111, 参照。

実は、日本も他のアジアの国々と同様、欧米キリスト教国に侵略される可能性のあった国である。従って日本でもキリスト者になることは、侵略者の宗教を受け入れるスパイ的行為と見なされた。

- (24) こうした誤謬の典型を古屋安雄の次に認めうる。

「つまり、日本ではキリスト教は欧米の帝国主義あるいは植民地主義の手先ではないかと、国家神道のナショナリズムと対立したのに、韓国ではその日本のナショナリズムに対抗するために、立ち上がった韓国の独立運動を支えるナショナリズムとキリスト教が結ばれたのである。韓国のキリスト教が盛んなのは、日本のおかげではないか、とまで言われている所以である」(古屋安雄『日本のキリスト教』教文館, 2003, p. 52)。

上の古屋の言を補言・要約すると以下のごとくならう。“日本も他のアジアの国々と同様、欧米キリスト教国に侵略される可能性のあった国である。従って日本でもキリスト教は侵略者(あるいはライバル国)の宗教であり、それを受け容れることは、当時日本のナショナリズムであった天皇制神道主義に反するスパイ的行為とみなされた。それに対し韓国は、アジアでは例外的に非キリスト教国日本によって侵略された国であった。従って、韓国はキリスト教を受け容れやすい国であった。これに加え、韓国では、反日・抗日・独立という愛国主義(ナショナリズム)が、非日本・非神道の宗教であるキリスト教と結びついた。この故に韓国のキリストは盛んになった。とすれば、それは日本のおかげではないのか”と。

つまり、この文章構造に従うかぎり古屋は、①非キリスト教国である日本が韓国を侵略したおかげで、②それが次に反日・抗日という愛国主義を(結果的に日本のおかげで)生じ、反日本的宗教である等の理由でキリスト教に結びつけるに至った、という2点を「日本のおかげ」と言っていると解するしかない。——これが誤謬である。

すでに述べたごとく、①は契機にすぎず、同じ契機から受容「主体」台湾はキリスト教を受け容れなかったし、また、同じ契機から、受容「主体」韓国は、②の状態を生じ、キリスト教を受容するに至ったとすれば、それは(特に②においては)受容主体である「韓国という国のおかげ」であり、歴史的・社会的・政治的・文化的な総和としての「韓国のおかげ」であり、日本のおかげではない。古屋の言は、韓国および韓国キリスト教に対して余りにも失礼である以前に、明らかな誤謬に基づいている。

- (25) 統計についてのみ、古屋安雄「フィリピン」; 所収、日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』日本基督教団出版局, 1991, p. 221, p. 234, 参照。

- (26) いずれも、高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』岩波書店, 1977, 同第1部第3論文「キリシタン宣教師の軍事計画」, p. 75～参照。なお本書は、従来の「日本キリシタン研究」に多い日本国内のみ視点を置く研究から脱皮し、スペイン、ポルトガルという国家の利害や各修道会の財政的、政治的根拠を明らかにし、よって日本キリシタン研究に新しい視点を開いたきわめて秀れた作品だと言える。

- (27) 以上については、〈T・バレンティノ・シトイ2世(寺田訳)「フィリピンのキリスト教」; 所収『アジア・キリスト教史 [2] ～フィリピン・インドネシア・タイ・ビルマ～』教文館, 1985, p. 12～56)〈柳田友信『日本基督教史』1959, 聖書図書刊行会, p. 7～27)参照。

韓国における初期キリスト教受容の要因 [上]

- (28) 高瀬弘一郎, 上掲書, 第I部, 第1, 第3論文, 参照。
- (29) 以上については, 高崎宗司「信仰の兄弟・内村鑑三」; 所収『「妄言」の原形～日本人の朝鮮観～(増補新版)』木犀社, 1996, p. 24～50, および姜在彦「キリスト教が結ぶ日本と朝鮮の架橋・二題」; 所収『玄界灘に架けた歴史—歴史的接点からの日本と朝鮮—』朝日出版社, 1993, p. 264～, 参照。
- (30) 安炳茂『民衆神学を語る』新教出版社, 1992, p. 24, 参照。
- (31) オスカー・クルマン(土岐, 湯川訳)『クリスマスの起源』教文館, 1996, p. 87～, 参照。(クルマンは『キリストと時』岩波書店, の著者として日本でも比較的良好に知られている神学者)。
- (32) いずれも安炳茂, 上掲書, p. 21, およびp. 24 参照。
- (33) 李仁夏(イ・インハ)「植民地下朝鮮のキリスト教」; 所収, 村上重良他編『宗教弾圧を語る』岩波書店, 1978, 第IV章, 参照。それによると, 当時ヒトラー政権下にあったドイツと日本は同盟関係にあったが, ドイツのユダヤ人狩りに類して, 朝鮮民族のことを「東亜のユダヤ民族」と称す日本人がいたことがわかる。つまり, 韓国人とユダヤ人を同列化したのは, 日本人であった。

参考文献

[A]

- 韓国基督教歴史研究所『韓国基督教の歴史, I』Seoul, 基督教文書, 1989.
- 韓国基督教歴史研究所『韓国基督教の歴史, II』Seoul, 基督教文書, 1990.
- ※同書は全3巻予定, 第IIIは未刊。もっとも信頼できる韓国キリスト教史。
- ※上, 第IIは邦訳あり, (韓哲曦, 蔵田雅彦, 監訳)『韓国キリスト教の受難と抵抗, 韓国キリスト教史1919-45』新教出版社, 1995。
- 閔庚培『新改訂版: 韓国基督教教会史』Seoul, 延世大学出版局, 1993.
- ※旧版の邦訳あり。(金忠一訳)『韓国キリスト教会史』新教出版, 1981.
- 柳東植『韓国のキリスト教』東京大学出版会, 1987.
- 閔庚培(澤正彦訳)『韓国キリスト教史』日本基督教団出版局, 1974.
- 柳東植(金忠一訳)『韓国の宗教とキリスト教』洋々社, 1975.
- 徐正敏『韓国教会史物語, 上・下』Seoul, マルスムグアマンナム, 2002.
- 呉充台『日韓キリスト教交流史』新教出版社, 1968.
- 池明観『韓国教会史』; 所収『韓国現代史と教会史』新教出版社, 1975.
- 柳東植(澤正彦訳)『韓国キリスト教神学思想史』教文館, 1986.
- 白樂濬『韓国改新教史, 1832-1910』Seoul, 延世大学校出版局, 1973.
- 澤正彦『未完・朝鮮キリスト教史』日本基督教団出版局, 1991.

[B]

- 李萬烈『韓国基督教受容史研究』Seoul, トウレ・シデ, 1998.
- 李徳周『初期韓国基督教史研究』Seoul, 韓国基督教歴史研究所, 1995.
- 徐正敏:(韓哲曦, 蔵田雅彦訳)『民族を愛した韓国キリスト者たち』日本基督教団出版局, 1991.
- 澤正彦『南北朝鮮キリスト教史論』日本基督教団出版局, 1982.
- 李萬烈『韓末基督教の民族意識形成過程』; 所収『韓国基督教と民族運動』Seoul, 鍾路書籍, 1986.

※同論は『韓, 第81号』1978, 『同, 第83号』1979年に上・下に分けて邦訳あり。

李萬烈「韓国教会の成長とその要因」; 所収『韓国キリスト教史研究: 韓国基督教と民族統一運動』
Seoul, 韓国基督教歴史研究所, 2001.

李光麟「開花派の改新教観」

李光麟「開花期の関西地方と改新教—改新教受容の一事例—」

※上, 2論文はいずれも『韓, 第81号』1978年, 『韓, 第83号』1979年に邦訳。

蔵田雅彦『天皇制と韓国キリスト教』新教出版社, 1991.

長田彰文『セオドア・ルーズベルトと韓国—韓国保護国化と米国—(朝鮮近代史研究双書, 11)』
未来社, 1992.

高崎宗司『「妄言」の原形: 日本人の朝鮮観』木犀社, 1996.

姜グンファン『韓国教会の形成とその要因の歴史的分析』Seoul, 大韓基督教教会, 2004.

安柄茂『民衆神学を語る』新教出版社, 1992.

高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』岩波書店, 1977.

山口正之『朝鮮西教史, 朝鮮キリスト教の文化史的研究』雄山閣, 1967.

山口正之『ローマ法皇庁古文書館所蔵: 黄嗣永帛書の研究』全国書房, 1946.

浦川和二郎『朝鮮殉教史』国書刊行会, 1973.

鄭兪玉(吉田寅訳)「台湾のキリスト教」; 所収, 土肥昭夫他『アジア・キリスト教史(1)』教文館,
1981.

杉本幹夫『データから見た, 日本統治下の台湾・朝鮮・フィリピン』龍溪書房, 1970.

日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』日本基督教団出版局, 1991.

T・バレンティノ・シトイ2世(寺田訳)「フィリピンのキリスト教」; 所収『アジア・キリスト教史(2)』
教文館, 1985.

古屋安雄『日本のキリスト教』教文館, 2003.

姜在彦『玄界灘に架けた歴史』朝日出版社, 1993.

[C]

韓国基督教歴史研究所, 金承台他編『資料叢書 第18号, 来韓宣教師総覧, 1884-1984, 附 'The
Korean Mission Field' 執筆別目録索引(修正増補版)』Seoul, 韓国基督教歴史研究所,
1996.

C. A. Clark, The Korean Church and the Nevius Methods, New York. Fleming, Revell Company,
1928.

小川圭治, 池明観編『日韓キリスト教関係史資料, I, 1876-1922』新教出版社, 1984.

富坂キリスト教センター編『日韓キリスト教関係史資料, II, 1923-1945』新教出版社, 1995.

『(日本)キリスト教年鑑, 2001年』キリスト教新聞社, 2001.

H. G. アンダーウッド, 韓哲曦訳『朝鮮の呼び声—朝鮮プロテスタント開教の記録—』未来社,
1976.

F. A. マッケンジー, 渡部学訳『朝鮮の悲劇』平凡社, 東洋文庫222, 1972.

F. A. マッケンジー, 韓哲曦訳『朝鮮の自由のための闘い: 義兵闘争から三一独立運動へ』太平出版社,
1972.